

時間の迷路

中村真一郎

時間の迷路

中村真一郎

中央公論社

時間の迷路

一九九三年七月一〇日 初版印刷
一九九三年七月二〇日 初版発行

著 者 中村真一郎

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

©一九九三 検印廃止

Printed in Japan

ISBN4-12-002228-5

時間 の 迷 路 + 目 次	第 一 章 女 の 手 記	第 二 章 男 の 手 記	第 三 章 女 の 手 記	第 四 章 男 の 手 記
	5	59	134	229

時間の迷路

第一章 女の手記

混乱——この言葉の恐ろしい意味を、六十歳を過ぎて、わたくしは人生のうえではじめて経験することになった。十歳になるやならずで、無理に母と引き離されて、あの憎むべき暴力的な父親の手で、日本に連れてこられて以来、わたくしは健気にも、自分の運命の糸を自分の手で握りつづけてやってきたと信じていた。戦争が終わり、富山県の山のなかの村に引退させられた、戦争責任者の退職外交官だった父親のもとから、逃げるように上京したのも自分の意志だったし、それから色いろあって、会長の秘書兼愛人となったのも、自分の選択だったし、その会長と一時別れて、スイスの印刷会社へ出向した中年時代、少女の頃に療養所で知り合って、わたくしの最初の男性になった彼と二十年ぶりにパリで再会、楽しい逢引きを重ねた間も、わたくしは自分の人生を生きていた筈だった。

それから少女時代の結核が再発し、帰国して、会長から比較的に閑な地位である青山の社交クラブの管理を任され、会長と、やがて帰国した彼とのふたりの男性のあいだに愛と肉欲とのバラ

ンスをとりながら、最近までやってきた間も、自分で自分の進む方向の梶をとりつづけていると思っていた。

それが去年の夏の終りから、一時にわたくしの足もとが崩れはじめ、わたくしは転落の途中で自分の手から運命の糸の端を手離してしまった。そうして気がついたら、ころげ落ちて眼の覚めたところが、このパリの贅沢なホテルの一室で、そうして毎晩、わたくしは会長の腕に抱かれて眠るという、若い頃のような生活に入ってしまった。

それまでのこの半年以上の混乱について、またわたくしが自分の運命の手綱を見失ったいきさつについて、この手記を書きはじめることにする。会長が毎日の習慣で昼寝をするあいだ、わたくしはこのホテルの、手紙を書くための、小さな古風な部屋に籠って、できるだけ自分に納得のいくように、様々の入り組んだ事情の絡み合いを、解きほぐしてみたいから。そうして本来のわたくしを再発見してみたいから。

でも、この「事情の絡み合い」を「入り組」ませたのは、同時に、幾つものわたくしの手とどかないところで、大きな企業の仕事のうえの変動や策謀の、その巻きぞえにわたくしが引きこまれたというだけでなく、わたくしの運命に直接関与する会長や彼やと、それにわたくし自身の思惑が、わたくしたちそれぞれの将来の關係について、それぞれ食いちがったままに介入して、お互いの欲望を通そうとし、そのためにわたくしたち三人——それにあの記憶喪失者である、国籍不明の少女ジャンヌの未来をも、計算に入れなければならなかったので——それらの別々の立場が、あるいはお互いに手をにぎり合ったり、敵対したり、本心をいつわって条件を出し合ったり、様々な「ベルミタシオン・コンピートン順列組み合せ」を繰り返したので、いよいよ糸のもつれは手におえなくなり、

途中からわたくしは、ただ大波に運ばれているような無抵抗の状態になってしまい、時どきは、つと気がついて、慌てて事態を自分の有利の方向にねじまげようと無理を言いだし、また振り出しに戻してしまつて男たちを困らせ、自分をも困らせたのだった。

いちばん厄介だったのは、わたくしが自分を見失つてしまい、自分の利害の判断がつかなくなり、また可能なことと不可能なことの区別も判らなくなり、要するに——あ、これ、彼の口真似——自分が何を望んでいるのか、自分が何者なのかさえ、見えなくなつてしまつたこと。

わたくしの六十年の生涯で、こうした混乱ははじめて。これはまさに悪魔の仕業としか思われない。毎週日曜、教会へ出掛け行つて、神さまにお祈りしたけれど、返つてきたのは沈黙だけ。こんなに神さまに見放されたことも、生れてはじめての経験で、わたくしは自分が生きながら地獄に堕ちてしまつたのかという恐怖に、時どき、魂が凍りつくことがある。そう言えば去年の夏のはじめから、彼はよく急に、人の集りのなかでも、道を歩いている最中でも、地獄のなかに自分が引き入れられる経験をするところがあると、告白していたけれど、その奇妙な病気がエイズのように、愛の行為によつて彼の身体からわたくしのからだへ伝染したのかしら。

もっとも彼の地獄は、自分だけがあの世に移動して、目のまえの人々や景色が、ヴェイルをへだてたように、遠く別世界の現象として見えはじめるといふのだけれど、わたくしの地獄は魂の奥に開けて、だから外部はあい変わらず、この世の光りに明るく照らされているのだから、なおさ

ら激しい孤独に襲われてしまう。

ここまで書いて、お部屋にそつと会長の様子を覗きに行つて来た。やっぱりお年のせい、そ

れともすべての責任ある役職から離れて、相談役とかいう閑職に退かれたために、長年のお疲れが一時に表面に出てこられたせいも、今度の旅行に出発する直前の、あの株主総会のすんだ頃から、急に会長は精気を失われ、毎晩、腕に抱かれていても、その肌から、今まではついぞ意識しなかった老人臭い枯葉のような匂いが立ち昇ってくる。昨年の秋のこちらの企業と協定の調印のために渡欧していた間の、会長のあの若返りが異常だっただけに、最近の老化は別人みたい。それについて去年までは、わたくしとベッドを共にすることなど、月に一度くらいだったのに、相談役に退かれてからは、財界の大先輩の「遺訓」だとかで、「男は健康上、八十五歳を過ぎたら、女性にはふたりに限定すべきだ」という忠告に従って、何人もの愛人を整理なさり、奥さまの他にはわたくしだけに「しほることにした」と、冗談まじりにおっしゃって、驚くことには株主総会の日から、ひと晩も欠かさず、わたくしを抱いて寝ながら、しかし身体の関係は持とうとしない。「とにかく疲れているから、暫く我慢してほしい」と、会長は気の毒そうに弁解なさるが、考えてみると、この半世紀近い会長との関係で、ベッドを共にしながら、わたくしを愛撫なさらなかったことは滅多にないし、わたくしが毎月の「不^{アンデイスボゼ}例」——この変な日本語の方、誰から教わったのかしら、間違っているかも知れないわね——の最中でも、会長は欲望のおもむくままに、容赦しなかったのに、たしかにお年相応に生理的な退化が訪れてこられたのだわ。そうして、去年の春のあのわたくしの骨折による入院以来、長年馴れ親しんだ会長の身体に対して、わたくしの感覚が拒絶反応を起しはじめているのだから、それにあの去年の秋の企業合同のための忙しかった渡欧中に見せた会長の珍しく凶暴な愛撫に、いよいよわたくしの違和感は昂じているのだから、この会長の突然のお疲れはわたくしには、大変に都合なのだが、そうしてこれは非常に奇妙な

ことには、わたくしの方でも、毎晩、男性とベッドを共にしながら、性的交渉をしないというのが、そろそろ習慣になりはじめて来ると、男性の肉体を肌を感じながら、わたくし自身の欲望も、眼覚めないままに、眠りに入ってしまうという、新しい現象が発生したのだ。考えてみると、わたくしもこの何十年間、男性に抱かれて寝て、欲望を燃え立たせなかったことは、最近の会長との場合を除いて一度もなかった。男性と共にベッドに入るといふことは、わたくしにとっては、そのままヴィーナスの戯れを意味していた。だからわたくしは、男性に抱かれて欲望抜きで眠るというのは、六十歳を過ぎてはじめて覚えた習慣だということになる。これはぜひ東京の彼のところには、大至急知らせてあげなければいけない。わたくしの今度の日本出発の前晩と、当日の午前との二回にわたって、彼は会長とわたくしの泊った成田の空港ホテルの別の部屋で、わたくしの身体に壊れるくらいの激しい愛撫^{カッツ}を与えてくれ、何ヶ月にわたるか判らない会長との今度の旅のあいだ、わたくしが会長に独占されることに、珍しく強い苛立ちを表明し、それから彼自身も、わたくしが去年以来、彼に対してしか欲望を感じなくなったと同様に、昨年の彼のヨーロッパ滞在以来、わたくしに対してしか快楽への衝動を覚えなくなってきたというので、わたくしの不在のあいだの欲望の調整をどうしたものかという不安も繰り返し、口にしていた。これは彼が亡くなった奥さまとのあいだで、彼の神経症の回復期に経験した「一夫一婦制的衝動」の三十年振りかの再発だというわけで、自分でそれにとまどっているらしい。わたくしたちがバリで再会して、忽ち身体の関係に入った二十年前には、ふたりとも法律的には独身だったので、「不倫」の問題は発生しなかったわけだけれど、彼は現代の資本主義社会にも社会主義社会にも一般的な「一夫一婦制」を、「ブルジョワ的偽善」であるといつて嘲笑し、個人の自由をより拡大する目的

ではじめられた社会主義的実験が、ソ連などで英国のヴィクトリア朝的な時代遅れのブルジョワ生活の実現を目標とするように変質しているのを、革命直後の「コロンタイ女史」——と言ったかしら、わたくしには初耳の名前だったけど——の男女の平等で自由な愛の理想がどこに消えてしまったのだと慨嘆し、自分のような卑怯者、臆病者の人類の進歩への貢献は、女性との自由で平等な交渉を通して、フランス革命の三つの標語、自由、平等、友愛^{リベルテ、エガリテ、フチテニテ}を、個人の段階でせめて実行するのだ、と半分冗談の口調で言いながら、わたくしを抱いたベッドの傍らの小さなテーブルに冷やしてある、シャンペンのグラスを、裸の腕で天井に差し上げて笑ったものだったけれど、あれは結構、彼の本音だったと思う。そうして彼と親密さの度合いの深まるにつれて、わたくしも自分の欲望のままに、その場その場の相手を胸のなかに迎えることが、世の貞淑ぶった、実際は欲求不満の奥さまたちよりも、正直であるばかりでなく、人類の進む方向へ踏み出している、誇らしい行為だと信じるようになっていたのだわ。

それがお互いこの年になって、貞淑という衝動が生れてきたということは、まことに珍しい現象だわ。自分で自分が信じられないくらい。そうしてその哲学的な分析は、例によって知性の怪物である彼に任せましょう。

そろそろ、会長のお目覚めの時間だと思うので、今はこの手帖を閉じます。

昨日、思いついて書きはじめたこの手記を、読み返してみた。するとノートのなかから立ち現れてくる女の面影と、その手記をこうして読み返している、なまのわたくしとのあいだの、あまりの開きの大きさに、自分でびっくりしてしまった。一体、どっちが本当のわたくしなのか、そ

れとも本当のわたくしなどというものは、もともと存在しないのか。困ったことになったわ。こういう時こそ、彼がわたくしをぎゅっと抱きしめて、説得してくれば、わたくしは忽ち、自己同一性を取り戻すことができるのに。去年の秋から、いつも必要な時は、彼が行方不明になっているか、わたくしが会長に監禁されているかで、そのせいでわたくし、自分が判らなくなりづめになって、混乱がはじまってしまったんだから。

考えてみると、会長——そう、今は相談役とかいうのだけれど、わたくしは慣れた今までの呼び方で通すことにする——も彼も、この半年、わたくしの要求に対して、色いろの新しい提案を繰り返したけれど、おふたりともそれぞれの原則にのっとって、そのヴァリエイションとして、様々の申し出をして来たので、さすがにおふたりとも、日本人としては例外的に、強情な原則主義者で、一度も自分を見失うことはなかったのね。わたくしはその両立しない、ふたつの別々の原則の、しかもわたくしのその時々望みに適応させようという、それぞれのヴァリエイションの大きな曲線にまだわされて、先方の原則も見えなくなったばかりでなく、わたくし自身まで行方不明にしてしまったのだわ。

それにしても、告白としての手記を書くというような、自分との対話の仕事は、どうもわたくしには向いていないのではないかしら。昨日の書きはじめの部分でも、書かれている事実には間違いないのだけれど、その事実についてのわたくしの記述を読むと、全く別のことのように見えてしまう。もしかすると、わたくしはわたくし自身とは、まるで関係のない、全く別人の姿を他人に見せて生きてきたのかも知れない。この間、彼が、わたくしたちが同時に感じるひとつの快楽の頂点の瞬間での魂の融合の感覚は、もしかして偶然に同じ時間のなかでの別々のオルガス

ムではないだろうかと言い出して、丁度、わたくしも同じ疑惑に苦しめられはじめていて、何とかそれが間違いであると打ち消したく思っていたところだったから、すごいショックを受けたけれど、わたくしの人生にとって、宿命である彼との関係さえ、お互いの孤独な身体の繋りにすぎないのだとすると、わたくしは空恐しくならないではいられない。

はじめのところでわたくしは「戦争責任者」である父親のもとを遁れ出たと書いたけれど、わたくしはついその数年まえまで、ナチの制服まがいの黒服を着て、革バンドと革の長靴を光らせて、全国の学校などをアジ演説して歩きまわっていた、チャップリンのようなひげを生やした滑稽なファシストと、それからあかでよごれ、無精ひげに顔を埋めて肩をすくめ、ほころびて綿のぞいた丹前をだらしなく着て、豚のように太った、元小作人の戦争未亡人にどなられながら、炬燵のなかにうずくまっている、あの田舎じいじとが同じ人間だとも思えなかったし、そのどちらも決して、わたくしの父ではなかった。

そうだわ。わたくしにとって父だったのは、週末ごとに秘書のわたくしを散歩に誘って、通りますぐりの店で季節の服や、アクセサリーなどを、気軽に買い与えてくれた、まだ五十歳まえの、背すじの伸びた、大股に歩く、自信に満ちた会長だった。あの方かたの身体のまわりに漂っているハバナの匂いが、わたくしにとっては、生れてはじめて知った父の匂いで、そうしてその男性の理想だった会長から、ゆっくりと時間をかけて、肉の快楽の感覚を開発されて行ったのは、わたくしにとって、本当に自然だった。わたくしは会長から、専用のホテルの部屋や、旅先や、箱根や軽井沢の別荘や、時には気まぐれに執務時間中の密室の革の長椅子のうえで愛撫される、その一回ごとに、会長に対して強く父親を感じるようになっていったのだわ。

わたくしにとって、はじめての男は、勿論、いま東京に残っている、彼の方で、それは十五歳かそこいらで、あの結核療養所の裏庭ではじめて若い彼から身体を奪われたからというわけではない。あれはわたくしにとっては事故のようなもの、ひとつの肉の洗礼ではあったが、肉を通しての快楽の平等な交換というのではなかった。それが会長との場合の、大きな愛撫のなかに幼児のように身を任せながら、ゆっくりと快楽の頂点に到達するというのは異って、激しく野獣の戯れのように、お互いに襲いあい、絡まりあって、貪欲に官能の喜びを相手から引き出しあうという経験を、中年になってバリの安宿で彼との間で繰りかえしている間に、わたくしは会長の胸のなかの幼な児から、成熟した一人前の女に成長したのだ。だから、彼がわたくしにとって、はじめての男であると同時に、生涯の男となったわけだわ。

わたくし、今日は何を書いているのか判らなくなってきた。会長のお目覚めを待って、ボワにドライブすることになっているから、今日はここでやめて、お召しかえにとりかかるとしよう。

昨日のブルーローニユの森の散歩と、あの中の島の白いレストランでのお食事は、わたくしの精神のなかの西洋人の部分に、久し振りに生きいきと血をめぐらせてくれた。わたくしは森の芝生のうえを、膝を出して駆けだしている、栗毛色や金髪やの子供たちを見ていると、そのなかに自分も混って、犬のあとを追いかけている小娘の魂が、自分のなかに目覚めてくるのを感じ、傍らから日本語で話しかけてきた、肌の浅黒い東洋人らしい老人が、わたくしの長年の保護者ではなく、一瞬、全くの見知らない外国人に錯覚された自分に驚いたものだった。

会長はひどく皺の寄った手の甲を、縞の模様のテーブルクロスので、わたくしの手に重

ね、「ぼくと君とのあの最終的な協定とは別に、今のこの瞬間の感情を正直に告白するとだね、ぼくのあまり遠くない死までのあいだ、君にそばにいてほしい、少なくとも日本で暮らしてほしい、と願うということになるね」、とそう言われて、わたくしの顔をのぞきこまれたのだが、その眼には何と力がなく、そしてその瞳は何かの剝製の鳥の眼のように、ガラス玉めいた生命力のないものに見えた。そして眼のしたの皺の袋も、今までになく大きくたるんでいて、そしてシミが表面を覆っていた。わたくしのなかに目覚めたばかりの西洋人の部分には、拒絶本能を引き起して咄嗟にその手を引き離そうとしたが、でも日本人の部分の方が習慣的に黙ってきて、心弱くもその会長の懇願に敗け、日本にご一緒に戻ってあげて、しばらくのあいだは、もう一方の彼の方には共同生活コウセイショウに入るのを待ってもらおうか、という優しい気持ちに引き戻された。そうして、その日本人としての反応の方が、わたくしの道德的感覚に快いのではないかしらという反省が、心の隅を横切って行った。

だからまずここで、会長とわたくしとの、こちらへ発つ前の「最終的な協定」のでき上るまでのいきさつについて、もう一度、考え直してみよう。そうして同時に、東京でわたくしからの合図を待っている彼の方との最終的な約束についても――。

わたくしの今度の、多分最後の運命の変転のドラマのはじまりは、まず会長が、その生涯の仕事の総決算として、ご自分の企業の傘下に、こちらの国際企業と協定を結ぶという形で、実は吸収合併をなさろうという、壮大な野心に捉えられたこと。その計画の詰めの段階で、反対の多いご自分の企業内の人間でなく、従来から個人的に意見を求めていた彼を、――そうだわ、青山のクラブの片隅でも、昨年のはじめ頃から、会長の計画が次第に具体的な姿を見せてくるように